

あすか

# 「飛鳥の里に大雪」

（夫婦間の明るくておおらかな戯れの贈答歌）

・天武二年（六七三）二月、飛鳥浄御原宮きよみはらのみやで即位した第三十九代・天武天

皇は、この宮に於いて、いわゆる公的な御製歌おのみうたでなくきわめて私的な恋

歌を里帰りしていた藤原夫人ふじわらのぶにん（奈良時代の政治家・藤原鎌足の娘・

五百重娘）いおえのいらつめとうたいかわしている。

天皇すめらみこと、藤原夫人ふじわらのぶにんに賜ふ御歌一首たま みうた

わ 我が里に 大雪降り 大原の  
ふ おおはら

ふ 古りにし里に 降らまくは後  
のち

## 卷二—一〇三

（解説）・この歌は、天武天皇が藤原夫人に「わが里には大雪が降ったぞ。

そなたの住む大原などの古びた里にはこのような風流な雪が降るのは  
もつと後だろうね」と戯れるようによんだ歌である。

・「わが里」とは天皇の居所であった奈良県の中央部付近に位置し、飛鳥  
時代の宮殿や史跡が多く発掘されていることで知られる明日香村の役  
場北にある平坦部を中心部に飛鳥時代に重複して宮殿が造られている  
遺構の一つである 「飛鳥浄御原宮伝承地（現在の明日香村字岡）」を

指し、また、藤原夫人が里帰りしていたと思われる「大原」とは現在の明日香村小原をいう、この地には藤原氏の居宅があったところで天皇の住む宮址とは北東へ僅か一キロメートルとは離れていない丘の上  
にあり降雪・積雪にはあまりかわりない距離なのに天皇と長年つれそ  
った妻だからこそ、信頼関係の上に立って天皇はからかい気味に歌を  
夫人に贈っていると思われる。「古りにし里」とは、都に対する田舎。

（写生地1）明日香村役場の北の平坦部にある「飛鳥浄御原伝承地」と前  
方に明日香村飛鳥集落と大原の里が集落の北東側にある森の裏から  
展望できる位置の風景を描く。（池田杏花）



藤原夫人、和こたへ奉まつる歌一首

おかみ

我が岡の 霏ひに言ひて 降らしめし  
雪のくだけし そこにちりけむ

卷二―一〇四

(解説)

- ・それに対して藤原夫人は、「あなた(天皇)のところ而降った雪は私の住む岡の辺たりの水神様にお願いして降らした 雪のかけらがそちらにちらついたのでしよう。」
- ・そちらに降った雪は先に降ったこちらの雪のおこぼれに過ぎないと茶目っ気たっぷりに天皇の戯れ歌にやり返している歌のようです。
- ・「我が岡」とは夫人の住む大原を指す。
- ・「霏(おかみ)」とは水や雨雪を支配すると信じられていた神をいう。
- ・雪のくだけしの「くだけし」はくだけたものの意で天皇の「大雪」に對して言い、「降る」に對して「散る」というなど天皇の言ったことに對して過少にとらえて答えるなど、このおおらかなかけ合いの戯れ歌から気をゆるしあった二人の仲の良さが伝わってくる。

(写生地2)

明日香村役場北にある「飛鳥浄御原伝承地」から一キロメートルはなれていない丘の上にある大原の里(現・明日香村小原)を描く。

(池田杏花)



(参考文献)

新潮日本古典集成「万葉集」、清原和義著「万葉の歌」等